

第三十五回宮島全国短歌大会  
選外佳作

(一一一)

兵庫 宇野の  
範子

桃の木は小さな二つの実をつける水やりをする楽しさのあり

(二二八)

長崎 金子  
寿美

放置田に山と積まれし廃車なり 「ミラー」は映す青葉わか葉を

(三三七)

山口 藤井  
重行

ローカルの赤き一輛夕日乗せ菜の花畑のそばを過ぎたり

(一一三三)

山口 中村  
蓉子

締切りがあるから短歌は出来るのか作るかは知らず四十年の過ぐ

(二三三八)

広島 岡田  
真知子

指先にほんのり温しラミネートされたばかりの診察券は

(一四六)

山口 正木  
洋子

となり家は老々介護に終止符を庭のどくだみ西日をうける

(一六四)

山口

伊藤

美紗代

来世も一緒にコーヒー飲みましょう慰霊の羅漢仏マグカップ持つ

(一八八)

広島

浜田

光夫

隣席にほんのり匂ふ樟脳を嗅ぎつつ香たく列に立ちたり

(二〇二)

広島

山本

初恵

年取れば笑顔が唯一の化粧だと鏡に微笑む横からも笑む

(二〇九)

島根

藤井

幹雄

生きてをれば米寿を迎へる友の服原爆に破れ展示室にあり

(二八五)

熊本

吉野

佳子

梅雨空のゆるく破けたひとところ翅の乾かぬ蜻蛉がのぼる

(三〇七)

山口

川上

恵子

美術館の茶房でゆったりカフェラテのパンダの顔を飲み込んでゆく

(三四五)

滋賀

船岡

房公

今宵見る弥山の月は西行の風待つ浦に出でし月かも

(三四九)

山口

田中

富美恵

色褪せてなほも晒さる紫陽花に吾の一世を重ね見てをり

(三六六)

青森

澁谷

善武

何発の核弾頭がこの星にあるかを知らず酒酌み交わす

(四〇六)

山口

佐藤

二三恵

青空に見得を切りたる如く湧く入道雲の猛猛しかな

(四二七)

広島

野平

浩之

燕子花咲き拡がりてこの春も群青なして泥土の池に

(四三三)

山口

藤田

淳子

忘れていい漢字ならむか 出征を小学三年ノートに書きゐる

(四四五)

山口

小田村

悠紀子

午前五時南瓜の雌花に花粉つけ今日の日程動き始める

(四八九)

広島

田中

伯児子

宮島へ向かう列車に翻訳のアプリを介し話す人あり

(四九六)

広島

村上

直子

手土産も甘い言葉も不要です良き客とふは疾く帰るべし

(五〇四)

山口

蘇  
怜耶

どこまでも続く菜の花見ていると浮かんで来ます母さんの顔

(五二〇)

広島

横山  
嘉代子

本物はやつぱりいいねと母の言ふ補聴器と入れ歯と老眼鏡と

(五五三)

広島

松本  
義子

白萩のこぼるる道の端通り遠回りでもこの道をゆく

(五七三)

愛知

清水  
良郎

眼に挟む小さきレンズに秋の日を集めて時計修理師の午後

(五八三)

山口

富岡  
和子

束ねたる古紙の重みはもとの樹の重みなり資源ゴミの日

(六〇五)

山口

原田  
雅子

物忘れすすむこの頃そうめんに多めに茗荷さくさく刻む

(六三三)

山口

森戸もりと

茂樹しげき

宮島に十年訪いて知らざりき静かに息づく裏通りあるを

(六九九)

広島

児玉こだま

日出子ひでこ

枝を張る樹々のあはひに土石流の跡そのままに夏は来にけり

(七三六)

広島

延近のぶちか

道江みちえ

戦後すぐの修学旅行で大根屋に枕なげした思い出の宿よ